

「万国津梁鐘」にみる琉球と朝鮮

荒木 和憲 ARAKI Kazunori
本館研究部／国際交流史

琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車と為し、日域を以て唇齒と為し、此の二つの中間に在りて湧出せる蓬萊島なり。舟楫を以て万国の津梁と為し、異産・至宝は十方刹に充滿し……(原漢文)

琉球は明と日本の「中間」にある島で、その密接な関係は「輔車」(上顎と下顎)と「唇齒」(唇と歯)のようである。朝鮮の秀でた文物も集まる。「舟楫」(船の往来)を「万国」の「津」(港)をつなぐ「梁」(架け橋)としている……。これはかつて首里城の正殿に懸けられていた梵鐘、いわゆる「万国津梁鐘」の銘文であり、東アジアと東南アジアを結ぶ中継貿易で繁栄する琉球王国の姿を活写した名文である。それにしても、「輔車」「唇齒」と表現される明・日本に対し、「秀を鍾め」という弱めのトーンで表現される朝鮮とは、どのような関係だったのだろうか。

そもそも東アジア海域で琉球が経済的に台頭したのは、一四世紀後半に明が自国民の海上活動を一切禁止したことによる。いわゆる「海禁」である。これは「倭寇」を封印するための劇的な政策であり、国内外の商人の経済活動までも封印するという重大な副作用をともなった。そのため、明は琉球を中継貿易のターミナルとして成長させるという緩和策を講じた。琉球に対して大型の海船や外交の実務に長けたスタッフをあたえ、毎年「朝貢」(皇帝への挨拶と貢ぎ物の献上)の使者を派遣させることとし、その機会に貿易を行ったのである。琉球三山のうち中山王は、明への朝貢はもちろん、一三八九年に高麗との通交を開始している。

一三九二年に建国された朝鮮は、明と同様、海禁を実施した。自国商人の活動を封印するかわりに、琉球・日本からの貿易を受け入れたのである。朝鮮でとくに需要が高かったのは赤色染料の原材料となる南海産の蘇木で、儀礼用の染織品の生産に必須であった。琉球の朝鮮貿易にとって蘇木は有力な輸出品目なのであるが、日本の諸勢力も琉球経由で流入



重要文化財 銅鐘(旧首里城正殿鐘)
沖縄県立博物館・美術館蔵

する蘇木を商品として朝鮮貿易に参画した。つまり、琉球と日本は朝鮮貿易上のライバルなのであり、また爪哇などの東南アジア諸国も朝鮮との通交を模索している。一四世紀末期〜一五世紀初期は東アジア海域の経済的覇権をめぐり、琉球・日本・東南アジアが競合する時代といえるだろう。

琉球国中山王の朝鮮との通交は、一三九二〜一四一〇年にこそ計六回が確認されるが、その後は下火になる。一四一八年に国王の次男の名義によるイレギュラーな通交がみられ、一四二二年頃の琉球使船は対馬で襲撃に遭ったとい、一四二三年には(ニセモノ)の琉球国王使が登場した。一四三〇年、朝鮮は漂流した琉球人を送還したさい、琉球側に「海を隔て音信が途絶えている」旨を伝えている。これに対し

一四三二年、琉球国王使が久々に朝鮮を訪れているが、国王の信書には「海道に詳しくないので音信が途絶えていた」との弁明が書かれており、国王使は対馬商人の早田六郎次郎の商船に便乗していた。これ以後、再び両国の通信は途絶え、一四五三年に朝鮮を訪れた琉球国王使は、なんと博多商人の道安であった。いちおう道安は(ホンモノ)の使者なのであるが、やがて対馬宗氏と博多商人の連携による(ニセモノ)の使者が横行するようになる。

「万国津梁鐘」が鑄造されたのは一四五八年。まさに琉球の朝鮮通交が日本の商人にジャックされたのは一四五八年。まさに琉球の朝鮮の秀を鍾め」という表現には、「琉球と朝鮮との外交関係は希薄であるが、博多・対馬を媒介として経済的・文化的にはリンクしている」という現実が凝縮されているのである。

ところで、「万国津梁鐘」は、琉球国王尚泰久の発願のもと北部九州系の鑄物師が鑄造したもので、銘文は京都の相国寺僧の筆になる。この梵鐘自体が日琉交流の証拠であるとともに、銘文は東アジア海域における琉球の位置を見事に表現している。沖繩戦の戦火をくぐりぬけ、古琉球に関する貴重な歴史情報は今に伝えてくれているのである。